

■2020年度事業計画 実績管理表

	項目	内容	目標	取り組みの成果と反省	改善策(次年度に向けた課題)
高校	1 ICT整備に伴う授業への活用				
	①新入生のタブレット活用	・無線LAN設置に伴い、年次進行で1・2年生全員の生徒がタブレットを持つことで、アクティブラーニング等をより意識した授業改善を図り、主体的で対話的で深い学びを意識した授業を実施し、学力の向上と共に ・年次進行でホワイトボード・プロジェクターが教室に設置され、タブレット導入とICT活用を意識した授業の実現を目指す。	・教員の研修を一層進めると共に、授業での活用など、他の学校の事例なども積極的に研修する機会を設ける 全教室にホワイトボードを配備とWi-Fi環境の整備	年間2回(5月・8月)の常勤講師を中心とした教員研修会の実施。また、自主的研修も奨励し、若年層を中心に研修活動を継続的にしている。 一部特別教室を除き配備完了。	研修費用の一定額の予算化。外部研修への派遣。中長期計画に応じた研修プログラムの計画。 GIGAスクール構想をにらみながら、性能の向上を図る。
	②Classiの活用	・昨年度から導入しているClassiを積極的に活用し、授業だけでなく緊急連絡を含めた保護者との連絡にも活用する。 ・2020年からの新しい大学入学共通テストを意識したClassiを利用したポートフォリオの蓄積を進める。	探究の時間における活用とLHR活動や担任による学級運営に利用する。 1～2年生の全クラスにおいて実践する。	基本的な活用はほぼ満足できる結果となっている。 Japanポートフォリオの頓挫により、国家としての方向性が希薄となったため、積極的な取組ができなかった。	Classiの応用的活用を検討する。 国家政策にとらわれず、本校独自音の学習評価体系の作成計画を立案する。
	2 教学改革				
	①2022年度新学習指導要領を踏まえた授業改善	・「総合的な探究の時間」を先行実施した昨年度から教育を軌道に乗せ、自分事として、自らの力で考え、生きる力を育成する。 ・2022年度からの新学習指導要領を踏まえた、各教科における授業改善と教育課程の研究をする。	・探究の意味や意義についても教員の共通理解を進めるための研修を行う 年間授業計画に新手法を練り込み、実践を踏まえたデータの蓄積を行う。	探究チーム内における実践・研究は進んだが、今年度はコロナ禍の中、他との比較ができない状況下にあった。 全教科にわたる実践とはならず、データとしての活用するには事例が少ない。コロナ禍の中、教員の日常業務が多忙となり、新しい取組を実践するには困難な状況であった。	校内における、実践報告会等を企画し、探究学習の担い手を増やす計画を立てる。 2022年発令の学習指導要領に完全対応できるよう、各コースを軸に各教科会で、研修、検討に努める。
	②授業改善	・メタ認知意識を生かし授業評価・学校評価を取り入れ、学校として授業改善に組織的に取り組む。 ・模擬試験の結果などを分析し、進路指導部を中心に検討することで教科指導に活かし学力の向上を目指し、生徒の進路希望の実現を図る。 ・建学の理念を元に、学校としてどのような生徒を育てるのかの共通理解を進め、各コースでの取り組みの特色をプラスし、各学年ごとの成長を振り返りながら、授業展開につなげる。 ・高大接続改革を意識し、新しい大学入試を視野に入れた授業改善に取り組むカリキュラム・マネジメントを進める。	・授業、学校満足度70パーセント以上 ・進路実績の向上 ・コース目標と実践計画に見合う成果の達成	・教務部・進路部・コース・各教科における連携がうまくとれず、目を見張るような成果を出すには至っていない。 ・コース内における実践計画が教科・学年としっかり共有できなかった。一分掌制度を目指す中、「コース」と「学年」の関係が明確にすることができなかった。	IRセンターの設置を計画し、データ収集と適切な活用方法を開発できるように準備する。 2022年度より学年制からコース制への移行を計画し、コースの特性を授業場面において明確に打ち出せるようにする。 教務部・進路部・各コースの協議体制を確立し、教科を巻き込む計画を練る。
	3 生徒募集				
	①入口の戦略	・全ての教員が経営意識を持ち、生徒募集活動にあたる。(人件費率が高いことを意識し、生徒の増減が給与に関係している意識を植え付け ・塾訪問を強化し、優秀な生徒確保につなげる。(塾担当者1名増員) ・奨学生制度に見直す。(専願者を確保する為の制度とする) ・基準の見直しを行う。(評定査定を見直し復活させる)	毎年420名の入学者を確保する。	学校運営における状況については、ほぼ共有できたと考えている。 塾担当者が2名となり、効果的な広報活動ができた。	教職員が経営的視点を持てるような研修を計画する。 塾との関係の方向性を検討する。 100%達成できた。 次年度も継続。
	②出口の戦略	・生徒の自己肯定感を高め、学校・授業の満足度を高め口コミも意識した戦略や対策を実施する。 ・一人一人の生徒を大切に、進学補習や温習・補充を大切に、生徒の希望進路を達成する。	生徒の学習状況および学校生活動向をデータ化し、それを下に目標達成を図る。 進路実現のための補習体制を実現する。	今年度は、新受験体制およびコロナ禍のため、戦略的に読み切れないところがあった。 コロナ禍の中、教員の日常業務が多忙となり、データ収集がままならず目標を達成するには困難な状況であった。	確かなデータを下に本校独自の進路指導体制を構築する。 進学補習において外部発注を含む新たな手法を組み入れ、無理なく、効果的な運用を目指す。 IRセンターの設置を計画し、データ収集と適切な指導方法を開発できるように準備する。
	③転退学者の減少	・中学校時代からの不登校生・公立高校不合格による不本意入学の生徒が多く縮めている現状を理解し対応する。	転退学率を2%に押さえる。	ほぼ達成。コロナ禍の中、生徒の高校生活傾向のデータ収集には困難な状況だった。	100%達成できた。 次年度も継続。
	4 組織改革	・教員会議を廃止し、職員会議を新設する。(議長団による運営から、校長が主宰し管理運営する) ・二分掌制と教員会議廃止し、一分掌制と職員会議を新設する。 ・運営会議内に改革プロジェクトを立ち上げ、校務運営委員会で改革案を具体化する。 ・学年色が強くなり学校としての統一感がなくならないように、校務運営委員会で統率を図る。		100%達成できた。 ほぼ達成。コースの扱いと人員の削減が今後の問題となる。 コロナ禍の中、対応すべき非日常的な案件が多発したため、改革プロジェクトの草案にとどまった。 ほぼ達成。ただ、未だに旧来の手法にこだわる傾向にあり、油断をすると一気に元に戻ってしまう。	前年度を踏襲し、合理的な改編を行う。 2022年～2023年にかけて実践できるよう、年度前半にはプロジェクトを立ち上げる。 学年制の廃止計画を明確にし、コース制および普通科の再編計画を立案する。
	5 事務所の改革	・教員が現金を預かる仕事を事務室に一元化する。 ・業者とのやり取りは全て事務室に一元化する。 ・教員がおこなう事務作業はできる限り事務所がおこなう。		100%達成できた。 100%達成できた。 100%達成できた。	次年度も継続。 次年度も継続。 次年度も継続。

6 令和3年度の改革	・令和3年度を大改革の初年度として位置づけ、今年度中に素案を完成させる準備を進める。		ほぼ達成できているが、新校長の理解度に温度差がある。	改革内容のさらなる精選をすることで、具体策として提示できるようにする。
	・世の中の教育改革の先頭をいく改革案を作り上げる。(教えずに育てる。生徒の心に火をつける教育の実践)		ほぼ達成できているが、新校長の理解度に温度差がある。	改革内容のさらなる精選をすることで、具体策として提示できるようにする。
	・働き方改革の先頭をいく改革案を作り上げ、優秀な教員を集める。(残業なし、取り組みたいとことにチャレンジできる)		十分とはいえないが、問題点は見えてきている。	法人事務局と協議の上、より具体的な改革計画を練り上げる。
	・カリキュラムの大幅な改革(週5日制を導入で90単位とし、土曜日、放課後に有意義な補習体制を確立する)		計画段階では、具体的な計画を提出されている。	2023年完全実施に向けて、調整する。
	・成功体験を積ますことで自己肯定感をあげる(成功の柱を学習だけにせず、幅広い価値観の養成をおこなう)		コロナ禍の中、教員の日常業務が多忙となり、目標を達成するには困難な状況だった。	2022年度の改定に向けて評価体系と共に改善計画を立案する。
	・校則のフルモデルチェンジをおこなう。(しぼられるものではなく、校則の意義を教える)		2022年度完全実施に向けての準備は整った。	2022年度完全実施に向けて、詳細について検討し完成させる。
	・制服を改革の目玉として、フルモデルチェンジする。	時代の先端を行く制服の開発	100%達成できた。	次年度も継続。